

坂口安吾

墮落論



墮
落
論

半年のうちに世相は変わった。醜しこの御楯みたてといでたつ我は。大君のへにこそ死なめかへりみはせじ。若者たちは花と散ったが、同じ彼らが生き残って闇屋やみやとなる。ももとせの命ねがはじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて。けなげな心情で男を送った女たちも半年の月日のうちに夫君の位牌にぬかずくことも事務的になるばかりであらうし、やがて新たな面影を胸に宿すのも遠い日のことではない。人間が変わったのではない。人間は元来そ

ういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ。

昔、四十七士の助命を排して処刑を断行した理由の一つは、彼らが生きながらえて生き恥をさらしせつかくの名を汚す者が現われてはいけないという老婆心であった。そうなる。現代の法律にこんな人情は存在しない。けれども人の心情には多分にこの傾向が残っており、美しいものを美しいまままで終わらせたいということは一般的な心情の一つのようだ。十数年前だかに童貞処女のまま愛の一生を終わらせようと大磯のどこかで心中した学生と娘

があつたが世人の同情は大きかつたし、私自身も、数年前に私ときわめて親しかつた姪の一人が二十一の年に自殺したとき、美しいうちに死んでくれてよかつたような気がした。一見清楚せいそな娘であつたが、壊れそうな危なさがあり真逆様に地獄へ堕ちる不安を感じさせるところがあつて、その一生を正視するに堪えないような気がしていたからであつた。

この戦争中、文士は未亡人の恋愛を書くことを禁じられていた。戦争未亡人を挑発墮落させてはいけないという軍人政治家の魂胆で彼女たちに使徒の余生を送らせよ

うと欲していたのである。軍人たちの悪徳に対する理解力は敏感であつて、彼らは女心の変わりやすさを知らなかつたわけではなく、知りすぎていたので、こういう禁止項目を案出に及んだまでであつた。

いったいが日本の武人は古来婦女子の心情を知らないと言われているが、これは皮相の見解で、彼らの案出した武士道という武骨千万な法則は人間の弱点に対する防壁がその最大の意味であつた。

武士は仇討ちのために草の根を分け乞食となつても足跡を追いまくらねばならないというのであるが、真に復

讐の情熱をもって仇敵の足跡を追いつめた忠臣孝子があつたであらうか。彼らの知っていたのは仇討ちの法則と法則に規定された名誉だけで、元来日本人は最も憎悪心の少ないまた永続しない国民であり、昨日の敵は今日の友という楽天性が実際の偽らぬ心情であろう。昨日の敵と妥協否肝胆相照らすのは日常茶飯事であり、仇敵なるがゆえにいつそう肝胆相照らし、たちまち二君に仕えたるがし、昨日の敵にも仕えたがる。生きて捕虜の恥を受けるべからず、というが、こういう規定がないと日本人を戦鬪にかりたてるのは不可能なので、我々は規約に従

順であるが、我々の偽らぬ心情は規約と逆なものである。日本戦史は武士道の戦史よりも権謀術数の戦史であり、歴史の証明にまつよりも自我の本心を見つめることによつて歴史のカラクリを知り得るであろう。今日の軍人政治家が未亡人の恋愛について執筆を禁じたごとく、いにしえ古の武人は武士道によつてみずからのまた部下たちの弱点を抑える必要があつた。

小林秀雄は政治家のタイプを、独創をもたずただ管理し支配する人種と称しているが、必ずしもそうではないようだ。政治家の大多数は常にそうであるけれども、少

数の天才は管理や支配の方法に独創をもち、それが凡庸な政治家の規範となって個々の時代、個々の政治を貫く一つの歴史の形で巨大な生き者の意志を示している。政治の場合において、歴史は個をつなぎ合せたものでなく、個を没入せしめた別個の巨大な生物となって誕生し、歴史の姿において政治もまた巨大な独創を行なっているのである。この戦争をやった者は誰であるか、東条であり軍部であるか。そうでもあるが、しかしまた、日本を貫く巨大な生物、歴史のぬきさしならぬ意志であったに相違ない。日本人は歴史の前ではただ運命に従順な子供で

あつたにすぎない。政治家によし独創はなくとも、政治は歴史の姿に於て独創をもち、意欲をもち、やむべからざる歩調をもつて大海の波のごとくに歩いて行く。何人が武士道を案出したか。これもまた歴史の独創、または嗅覚きゆうかくであつたであらう。歴史は常に人間を嗅かぎだしてゐる。そして武士道は人性や本能に対する禁止条項であるために非人間的反人間的なものであるが、その人性や本能に対する洞察の結果である点においては全く人間的なものである。

私は天皇制についても、きわめて日本的な（したがっ

てあるいは独創的な）政治的作品を見るのである。天皇制は天皇によって生みだされたものではない。天皇は時にみずから陰謀を起こしたこともあるけれども、概して何もしておらず、その陰謀は常に成功のためしがなく、島流しとなったり、山奥へ逃げたり、そして結局常に政治的理由によってその存立を認められてきた。社会的に忘れた時にすら政治的に担^{かつ}ぎだされてくるのであって、その存立の政治的理由はいわば政治家たちの嗅覚によるもので、彼らは日本人の性癖を洞察し、その性癖の中に天皇制を発見していた。それは天皇家に限るものではない

い。代わり得るものならば、孔子家でも釈迦家でもレニン家でも構わなかった。ただ代り得なかったただけである。

すくなくとも日本の政治家たち（貴族や武士）は自己の永遠の隆盛（それは永遠ではなかったが、彼らは永遠を夢みたであろう）を約束する手段として絶対君主の必要を嗅ぎつけていた。平安時代の藤原氏は天皇の擁立を自分勝手にやりながら、自分が天皇の下位であるのを疑ぐりもしなかったし、迷惑にも思っていないかった。天皇の存在によってお家騒動の処理をやり、弟は兄をやりこ

め、兄は父をやっつける。彼らは本能的な実質主義者であり、自分の一生が愉しければ良かつたし、そのくせ朝儀を盛大にして天皇を拝賀する奇妙な形式が大好きで、満足していた。天皇を拝むことが、自分自身の威厳を示し、また、みずから威厳を感じる手段でもあったのである。

我々にとっては実際馬鹿げたことだ。我々は靖国神社の下を電車が曲るたびに頭を下げさせられる馬鹿らしさには閉口したが、ある種の人々にとっては、そうすることによってしか自分を感じる事ができないので、我々

は靖国神社についてはその馬鹿らしさを笑うけれども、ほかの事柄について、同じような馬鹿げたことを自分自身でやっている。そして自分の馬鹿らしさには気づかないだけのことだ。宮本武蔵は一乗寺下り松の果たし場へ急ぐ途中、八幡様の前を通りかかって思わず拝みかけて思いとどまったというが、吾神仏をたのまずという彼の教訓は、このみずからの性癖に発し、また向けられた悔恨深い言葉であり、我々は自発的にはずいぶん馬鹿げたものを拝み、ただそれを意識しないというだけのことだ。道学先生は教壇でまず書物をおしいただくが、彼はその

ことに自分の威厳と自分自身の存在すらも感じているのである。そして我々も何かにつけて似たことをやっている。

日本人のごとく権謀術数を事とする国民には権謀術数のためにも大義名分のためにも天皇が必要で、個々の政治家は必ずしもその必要を感じていなくとも、歴史的な嗅覚において彼らはその必要を感じるよりも自らの居る現実を疑ぐることがなかったのだ。秀吉は聚楽じゅらくに行幸を仰いでみずから盛儀に泣いていたが、自分の威厳をそれによって感じると同時に、宇宙の神をそこに見ていた。

これは秀吉の場合であつて、他の政治家の場合ではないが、権謀術数がたとえば悪魔の手段にしても、悪魔が幼児のごとくに神を拝むことも必ずしも不思議ではない。どのような矛盾も有り得るのである。

要するに天皇制というものも武士道と同種のもので、女心は変わりやすいから「節婦は二夫に見え^{まみ}ず」という、禁止自体は非人間的、反人性的であるけれども、洞察の真理において人間的であることと同様に、天皇制自体は真理ではなく、また自然でもないが、そこに至る歴史的な発見や洞察において軽々しく否定しがたい深刻な意味

を含んでおり、ただ表面的な真理や自然法則だけでは割り切れない。

まったく美しいものを美しいまままで終わらせたいなどと希うことは小さな人情で、私の姪の場合にしたところで、自殺などせず生きぬきそして地獄に堕ちて暗黒の曠野こうやをさまようことを希うべきであるかも知れぬ。現に私自身が自分に課した文学の道とはかかる曠野の流浪であるが、それにもかかわらず美しいものを美しいまままで終わらせたいという小さな希いを消し去るわけにも行かぬ。未完の美は美ではない。その当然堕ちるべき地獄で

の遍歴に淪落自体が美でありうる時に始めて美とよびうるのかも知れないが、二十の処女をわざわざ六十の老醜の姿の上で常に見つめなければならぬのか。これは私には分らない。私は二十の美女を好む。

死んでしまえば身も蓋もないというが、果してどういうものであるか。敗戦して、結局気の毒なのは戦歿した英霊たちだ、という考え方も私は素直に肯定することができない。けれども、六十すぎた將軍たちがなお生に恋々として法廷にひかれることを思うと、何が人生の魅力であるか、私には皆目わからず、しかしおそらく私自

身も、もしも私が六十の將軍であつたならやはり生に恋々として法廷にひかれるであろうと想像せざるを得ないので、私は生という奇怪な力にただ茫然たるばかりである。私は二十の美女を好むが、老將軍もまた二十の美女を好んでいるのか。そして戦歿の英靈が気の毒なもの二十の美女を好む意味においてであるか。そのように姿の明確なものなら、私は安心することもできるし、そこからいちずに二十の美女を追っかける信念すらも持ちうるのだが、生きることとは、もっとわけのわからぬものだ。

私は血を見ることが非常に嫌いきらいで、いつか私の眼前で

自動車が衝突したとき、私はクルリと振り向いて逃げだしていた。けれども、私は偉大な破壊が好きであった。

私は爆弾や焼夷弾に戦おののきながら、狂暴な破壊に劇はげしく亢奮こうふんしていたが、それにもかかわらず、このときほど人間を愛しなつかしんでいた時はないような思いがする。

私は疎開をすすめたすすんで田舎の住宅を提供しようとして申し出てくれた数人の親切をしりぞけて東京にふみとどまっていた。大井広介の焼跡の防空壕を、最後の拠点にするつもりで、そして九州へ疎開する大井広介と別れたときは東京からあらゆる友達を失った時でもあった

が、やがて米軍が上陸し四辺に重砲弾の炸裂さくれつするさなか
にその防空壕に息をひそめている私自身を想像して、私
はその運命を甘受し待ち構える気持になつていたのであ
る。私は死ぬかも知れぬと思つていたが、より多く生き
ることを確信していたに相違ない。しかし廢墟に生き残
り、何か抱負を持つていたかと云えば、私はただ生き残
ること以外の何の目算もなかつたのだ。予想し得ぬ新世
界への不思議な再生。その好奇心は私の一生の最も新鮮
なものであり、その奇怪な鮮度に対する代償としても東
京にとどまることを賭ける必要があるという奇妙な呪文じゅもん

に憑かれていたというだけであつた。そのくせ私は臆病で、昭和二十年の四月四日という日、私は始めて四周に二時間にわたる爆撃を経験したのだが、頭上の照明弾で昼のように明るくなった、そのときちようど上京していた次兄が防空壕の中から焼夷弾かと訊いた、いや照明弾が落ちてくるのだと答えようとした私は一応腹に力を入れた上でないと声が全然でないという状態を知つた。また、当時日本映画社の囑託だつた私は銀座が爆撃された直後、編隊の来襲を銀座の日映の屋上で迎えたが、五階の建物の上に塔があり、この上に三台のカメラが据えて

ある。空襲警報になると路上、窓、屋上、銀座からあらゆる人の姿が消え、屋上の高射砲陣地すらも掩壕えんごうに隠れて人影はなく、ただ天地に露出する人の姿は日映屋上の十名ほどの一団のみであった。まず石川島に焼夷弾の雨がふり、次の編隊が真上へくる。私は足の力が抜け去ることを意識した。煙草をくわえてカメラを編隊に向けている憎々しいほど落ち着いたカメラマンの姿に驚嘆したのであった。

けれども私は偉大な破壊を愛していた。運命に従順な人間の姿は奇妙に美しいものである。麴町のあらゆる大

邸宅が嘘のように消え失せて余燼よじんをたてており、上品な父と娘がたった一つの赤皮のトランクをはさんで濠端の緑草の上に坐っている。片側に余燼をあげる茫々たる廃墟がなければ、平和なピクニックと全く変わるところがない。ここも消え失せて茫々ただ余燼をたてている道玄坂では、坂の中途にどうやら爆撃のものではなく自動車にひき殺されたと思われる死体が倒れており、一枚のトタンがかぶせてある。かたわらに銃剣えんえんの兵隊が立っていた。行く者、帰る者、罹災者たちの蜿蜒えんえんたる流れがまことにとただ無心の流れのごとくに死体をすりぬけて行き交

い、路上の鮮血にも気づく者すら居らず、たまさか気づく者があっても、捨てられた紙屑を見るほどの関心しか示さない。米人たちは終戦直後の日本人は虚脱し放心していると言ったが、爆撃直後の罹災者たちの行進は虚脱や放心と種類の違った驚くべき充満と重量をもつ無心であり、素直な運命の子供であった。笑っているのは常に十五、六、十六、七の娘たちであった。彼女たちの笑顔は爽さわやかだった。焼跡をほじくりかえして焼けたバケツへ掘りだした瀬戸物を入れていたり、わずかばかりの荷物の張番をして路上に日向ひなたぼっこをしていたり、この年

ごろの娘たちは未来の夢でいっばいで現実などは苦にならないのであろうか、それとも高い虚栄心のためであるうか。私は焼野原に娘たちの笑顔を探すのがたのしみであつた。

あの偉大な破壊の下では、運命はあつたが、墮落はなかつた。無心であつたが、充満していた。猛火をくぐつて逃げのびてきた人たちは、燃えかけている家のそばに群がって寒さの暖をとっており、同じ火に必死に消火につとめている人々から一尺離れているだけで全然別の世界にいたのであつた。偉大な破壊、その驚くべき愛情。

偉大な運命、その驚くべき愛情。それに比べれば、敗戦の表情はただの墮落にすぎない。

だが、墮落ということの驚くべき平凡さや平凡な当然さに比べると、あのすさまじい偉大な破壊の愛情や運命に従順な人間たちの美しさも、泡沫ほうまつのような虚むなしい幻影にすぎないという気持がする。

徳川幕府の思想は四十七士を殺すことによって永遠の義士たらしめようとしたのだが、四十七名の墮落のみは防ぎ得たにしたところで、人間自体が常に義士から凡俗へ、また地獄へ転落しつづけていることを防ぎうるよし

もない。節婦は二夫に見えず、忠臣は二君に仕えず、と
規約を制定してみても人間の転落は防ぎ得ず、よしんば
処女を刺し殺してその純潔を保たしめることに成功して
も、墮落の平凡なあしおと跫音、ただ打ちよせる波のようなその
当然な跫音に気づくとき、人為の卑小さ、人為によって
保ち得た処女の純潔の卑小さなどは泡沫のごとき虚しい
幻像にすぎないことを見いださずにいられない。

特攻隊の勇士はただ幻影であるにすぎず、人間の歴史
は闇屋となるところから始まるのではないのか。未亡人
が使徒たることも幻影にすぎず、新たな面影を宿すところ

ろから人間の歴史が始まるのではないのか。そしてあるいは天皇もただ幻影であるにすぎず、ただの人間になるところから真実の天皇の歴史が始まるのかも知れない。

歴史という生き物の巨大さと同様に人間自体も驚くほど巨大だ。生きるという事は実に唯一の不思議である。六十七十の將軍たちが切腹もせずくつわ轡くつわを並べて法廷にひかれるなどとは終戦によって発見された壮観な人間図であり、日本は負け、そして武士道は亡びたが、墮落という真実の母胎によって始めて人間が誕生したのだ。生きよ墮おちよ、その正当な手順のほかにも、真に人間を救い得

る便利な近道がありうるだろうか。私はハラキリを好まない。昔、松永弾正まつながだんじょうという老獪陰鬱ろうかいいんうつな陰謀家は信長に追いつめられて仕方なく城を枕まくらに討ち死にしたが、死ぬ直前に毎日の習慣通り延命の灸きゆうをすえ、それから鉄砲を顔に押し当て顔を打ち砕いて死んだ。そのときは七十を過ぎていたが、人前で平気で女と戯れる悪どい男であった。この男の死に方には同感するが、私はハラキリは好きではない。

私は戦きながら、然し、惚ほれ惚ぼれとその美しさに見とれていたのだ。私は考える必要がなかった。そこには美

しいものがあるばかりで、人間がなかったからだ。実際、泥棒すらもいなかった。近ごろの東京は暗いというが、戦争中は真の闇で、そのくせどんな深夜でもオイハギなどの心配はなく、暗闇の深夜を歩き、戸締まりなしで眠っていたのだ。戦争中の日本は嘘のような理想郷で、ただ虚^{むな}しい美しさが咲きあふれていた。それは人間の真実の美しさではない。そしてもし我々が考えることを忘れるなら、これほど気楽なそして壮観な見世物はないだろう。たとえば爆弾の絶えざる恐怖があるにしても、考えることがない限り、人は常に気楽であり、ただ惚れ惚れと

見とれておれば良かったのだ。私は一人の馬鹿であった。最も無邪気に戦争と遊び戯れていた。

終戦後、我々はあらゆる自由を許されたが、人はあらゆる自由を許されたとき、自らの不可解な限定とその不自由さに気づくであろう。人間は永遠に自由ではあり得ない。なぜなら人間は生きており、また死なねばならず、そして人間は考えるからだ。政治上の改革は一日にして行なわれるが、人間の変化はそうは行かない。遠くギリシヤに発見され確立の一步を踏みだした人性が、今日、どれほどの変化を示しているであろうか。

人間。戦争がどんなすさまじい破壊と運命をもって向かうにしても人間自体をどうなしうるものでもない。戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変わりはない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外のことに人間を救う便利な近道はない。

戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから

墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだろう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄のごとくではあり得ない。人間は可憐かれんであり脆ぜいじやく弱であり、それゆえ愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはいられず、武士道をあみださずにはいられず、天皇を担ぎださずにはいられなくなるであろう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。そして人のご

とくに日本もまた墮ちることが必要であろう。墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならぬ。政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館